日本語「自己実現」の歴史的原点についての実証研究
―「自己」でなく「自我」である深み―

佐々木　英和

宇都宮大学共同教育学部研究紀要　第71号　別刷

2021年3月

日本語「自己実現」の歴史的原点についての実証研究
―「自己」でなく「自我」である深み―

A Factual Study about the Historical Origin
of a Japanese Word *Jiko-Jitsugen* Indicating Self-Realization :
Why was "Self" Translated as *Jiga* Instead of *Jiko* ?

佐々木　英和[†]
SASAKI Hidekazu

【要約】

本研究は実証研究であり、今や現代に生きる日本人の中で一般的な日本語として普及している「自己実現」の歴史的原点が1895年だと定めることができた。さらなる研究成果として、付随的に、以下の重要なことも判明した。第一に、日本語「自己実現」は、倫理学者の中島力造が英語 "self-realization" を「自我実現」として訳す形で初登場したが、「自己」でなく「自我」であることに深い意味があった。第二に、当時の自己実現は、あくまでも「個人と社会との調和」を意味する思想であり、アリストテレス的な最高善の思想まで遡るとみなされた。第三に、「自己実現」や「自我実現」といえば、19世紀のイギリス理想主義運動を指導した政治哲学者であるトーマス・ヒル・グリーンの名前が思い浮かべられがちだったけれども、日本における自己実現の実際の内容は、グリーンの難解で理解されにくい自己実現理論を含めた新しい倫理学思想を広めようとしたジョン・ヘンリー・ミューアヘッドの通俗的な教科書が大本になっている。

キーワード：自己実現、自我実現、自己、自我、共通善、個人と社会との調和、トーマス･ヒル･グリーン、ジョン・ヘンリー・ミューアヘッド、アリストテレス、中島力造、桑木厳翼

【Summary】

This positive research has fixed the historical original point of a Japanese word *jiko-jitsugen*, which is very popular among modern Japanese people, in 1895. This study also found some important related facts. First, when Rikizo Nakashima, a Japanese ethical scholar, translated the British term "self-realisation" as the Japanese word *jiga-jitsugen*, for the first time, there was a profound reason why "self" was translated not into *jiko* but into *jiga*. Second, self-realization at that time was imported as an idea signifying a harmony between individual and society, which could extend back to the Aristotelean idea of superlative goodness. Third, both *jiko-jitsugen* and *jiga-jitsugen* became famous as an idea of Thomas Hill Green, a political philosopher leading the 19th-century British Idealism movement, although the actual contents of self-realization in Japan originated in the

[†] 宇都宮大学 地域創生推進機構（連絡先：sasakih@cc.utsunomiya-u.ac.jp　佐々木英和）

vulgarized textbook of John Henry Muirhead, a professor of moral philosophy, who made efforts to prevail some new ethical ideas including Green's recondite and little-understood self-realization theory.

Keywords：Self-realization, Self, Common good, Harmony between individual and society, Thomas Hill Green, John Henry Muirhead, Aristotle, Rikizo Nakashima, Genyoku Kuwaki

はじめに

筆者は、修士論文で「自己実現」を主題として以来、この日本語の歴史的原点を定めたいと願って、研究活動を行ってきた。四半世紀ほどの時を経た積み重ねの成果でもあるのだが、幸いなことに、歴史的史料の獲得に恵まれた。まず、『哲学雑誌』（創刊当時は『哲学会雑誌』）を1887（明治20）年の創刊号から1955（昭和30）年まで全729巻揃えて、手元に置いて直に見られる体制を整えることができた。また、1897（明治30）年に結成された丁酉倫理会の定例会における諸々の講演記録を編集して発行した雑誌『倫理講演集』について、創刊号発刊の1900（明治33）年から後続誌廃刊の1949（昭和24）年までの547冊すべてを揃えられたことが、様々な角度から本研究を深化させた。結論的に言えば、本稿の成果により、しばらくは手つかずにして放置していた難題、すなわち日本語「自己実現」の歴史的原点を確定するという課題に片がついた。

実は、この作業は、7年ほど前に、いったん完了させている[1)]。だが、本稿は、それのやり直しも兼ねた論文となっている。この最大の理由は、重要な事実の新発見があり、それに応じた見解の修正を図らなければならないところが出てきたため、その点を公表したいと考えたことである。また、当時は、共著の中の一つの論文であるがゆえの紙幅の制限があったために、割愛せざるをえなかった部分がいくつかあったが、それにより趣旨が伝わりにくい点が若干あったので、改めて補った。さらに、「歴史的原点」という言い方をするのであれば、本来なら書くべきであろうというポイントに新たに気づいたため、こうした流れの中で書き加えた。

いずれにしても、筆者としては、教育、福祉、労働、経営、政治など、様々な分野で通俗化し日常的にも頻繁に用いられる言葉となった「自己実現」が、いまだに学術的に曖昧なまま用いられ続けていることに歯がゆさを感じている[2)]。その点で、本稿を、この言葉についての「事実」を広く認知してもらうための足がかりに活用してもらいたいと考えている。

なお、本文では、漢字の旧字体を新字体にした。たとえば、「實」を「実」に改めているので、「自己実現」と表記されているものの元は、「自己實現」である。また、平仮名は基本的にそのまま表記したが、濁点を打ったり漢字を平仮名表記に変えたりなどして読みやすくしたところが一部ある。

Ⅰ　グリーン倫理学の輸入の様相

いったいいつ頃から「自己実現」という日本語は存在したのか。今となっては、いくつもの手がかりを筆者は獲得できているが、研究当初の皆目見当もつかなかった頃を振り返り、研究方法の原点に立ち返った際の手順を思い出したい。いずれにせよ、用語調査とは、手元にある辞書を引くことから

始めるのが、常套手段である。

極めて注意すべきことだが、1991（平成3）年に発行された『広辞苑[第四版]』には、そもそも「自己実現」という見出しが存在しておらず、近辺に“自己疎外”を見つけることができるのみである[3)]。だが、その代わりに、“自我実現説”という見出し語が存在し、そのまま“自己実現説”に言い換えうることが発見できた[4)]。この辞書によれば、この「自我実現説」は哲学用語であり、“最高善たる究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、グリーン・ユングなどの説”だと定義されている[5)]。

1998（平成10）年に発行された『広辞苑[第五版]』では、ようやく“自己実現”が見出し語になり、“自分の中にひそむ可能性を、自分で見つけ、十分に発揮していくこと”や“また、それへの欲求”という定義が出てきた[6)]。1991年から1998年に至るまでの変化を見すえると、他の辞書はともかく、当時の『広辞苑』の編集委員会の判断として、「自己実現」という言葉が、1990年代以降に一般的な日本語として定着したとみなされたのではなかろうか。

よって、「自己実現」という日本語の源流を探るには、「自己実現説」と言い換えられる「自我実現説」に注目するほうが、効果的な手がかりが得られそうである。そこで、2018（平成30）年に発行された最新の『広辞苑[第7版]』で、“自我実現説”を改めて引いてみると、やはり“自己実現説”という言い換えが残っており、“最高善を目指す人間の究極目的は自我の本質の完成・実現にあるとする、T.H.グリーン・ブラッドリーなどの説”という定義が示されていた[7)]。この「自我実現説」は、『広辞苑[第四版]』の説明では「グリーン・ユングなどの説」となっていたが、『広辞苑[第七版]』の説明では、「T.H.グリーン・ブラッドリーなどの説」と置き換わっている。ここで注目すべきは、時代を超えて名前が残っている「T.H.グリーン」なる人物である。

そこで、1932（昭和7）年に出された『グリーンとその倫理学』という著作を入手し、紐解いてみると、以下のような表現にぶち当たった。

> 苟くも倫理学を口にするもので自我実現説を知らぬものはなかろう。同時に自我実現説を語って、直ちにグリーンを想起しないものはあるまい[8)]。

この二文から、第二次世界大戦前の日本の倫理学分野では「自我実現説」という言葉がすでに常識化していて、その説がグリーンという人物と密接な関連があることがうかがわれる。どうやら、グリーンは、日本語「自己実現」の原点を歴史的に探る上で最重要人物のような気配が漂っている。この人物をきっかけにして、何とか原点に辿り着けるようにしたい。

A　中島力造によるグリーン理論の紹介

明治・大正期に活躍した倫理学者の中島力造は、1892（明治25）年10月19日に東京帝国大学で行われた哲学会第74回例会で「英国新カント学派に就て」という題の講演を行った[9)]。この講演内容は、哲学会編『哲学雑誌』の1892（明治25）年11月5日発行号・12月5日発行号、1893（明治26）年1月10日発行号・2月10日発行号の4回に分けて連載され、これらを読んだ読者に相当な影響を与えた。

中島は、“新カント派の代表者”であるトーマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green）について、“哲学者として知られたのみならず、世の中の慈善家或は改良家として非常に尊敬せられた人物”だと紹介した[10)]。中島は、その思想を、以下のように位置づけた。

以上論ずる如き所が「グリーン」氏の学説でありますから、之に由て代表さるゝ英国新カント学派或は「ヘーゲル」学派は要するに「カント」の哲学を「ヘーゲル」の眼を以て読んだもの、「ヘーゲル」の足場から「カント」の足らざる所を補ひ説明せんとしたものと云ふて差支なからうと思ひ升[11]。

英国人であるグリーンは、ドイツ観念論哲学の大家であるカント（Immanuel Kant）とヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）との双方を積極的かつ調和的に取り入れた点で異彩を放っており、そのことが高い評価につながっているわけである。だが、中島は、グリーンの紹介者であったとはいえ、その思想に必ずしも満足していたわけではない。

（前略…引用者）、全体新カント学派では関係と云ふことを実体の如く看做して居る、併し物が無くして関係が出てくる筈がありませぬ、物と物との間に関係が起るので物なしに関係が出来る訳はありませぬ、然るに関係が世の中に実体として立て歩行て居るやうに説くのですが、之は私には受け取れませぬ、物が無うして関係が起るといふ事は私には考へられませぬ、関係せらるゝものがあつて関係が起るのではないかと思ひます、（後略…引用者）[12]。

中島は、「物が先か」それとも「関係が先か」といった場合に、前者の立場しかありえないと考えていた。この主張に象徴的なように、当時の中島は、グリーン倫理学を十分には理解できなかった、もしくは理解しようとせず、実証主義的前提に立ち批判的に捉えていたとみなせる[13]。このこととともあいまった形で、日本語の「自己実現」はおろか、イギリス英語の“self-realisation”（アメリカ英語では“self-realization”）について語った形跡はなかった。よって、1892（明治25）年の10月の時点は、日本語「自己実現」の登場という意味では、あくまでも準備段階に踏みとどまっている。

B　トーマス・ヒル・グリーンの自己実現思想

実際、グリーンの倫理学を代表する書物である“*Prolegomena to Ethics*”（以下、『倫理学序説』と称す）は決して平明ではなく、それどころか極めて難解であった。そのため、この書物をじかに翻訳しようとする人は、なかなか出てこなかった。こうした状況下で、この難問に果敢に挑んで成果を出したのが、中島力造の弟子の西晋一郎である[14]。

まず、西は、1901（明治34）年に、倫理学書を解説するシリーズの中の一冊として『グリーン氏倫理学序論』を出しているが、“永久的の意識が自己を実現する、若くは再現する”といった表現を用いて、内容的に「自己実現」に相当する事柄を解説している[15]。西は、翌年の1902（明治35）年に『グリーン氏倫理学』を出版し、その訳語索引において、“Self-realization”に対して“自己実現”という日本語を当てている[16]。具体的に、以下のような文章がある。

神的原理の自己実現が自己自身を以て其の対象となす所の意識の中に於てするにあらずして他の方法に於てするを得べしと許容するは、吾人をして神的原理がしかく自己を人の中に於て実現すと信ずるに至らしめたる根拠其の物と矛盾するものなり[17]。

この一文に象徴的なように、グリーン流の自己実現とは、神聖なる存在が個々人の意識を媒介とし

て自ら実現していくはずのものである。こうした内容は、観念的で抽象度が高く、自らの経験に照らし合わせて具体的な実感を伴って理解することを困難にする。まして、キリスト教的背景を持つ西洋人のグリーンとバックグラウンドの異なる日本人には、感覚的に受容しにくい面が多々ある。そのため、グリーン倫理学を十分に咀嚼できていた人は少数であったろうし、グリーン流の自己実現思想が直に普及していったとも考えにくい。

いずれにせよ、西により、「自己実現」という日本語が、どんなに新しくても1902（明治35）年以前には公表されていたことが確認できる。裏返して考えれば、1892（明治25）年から1902（明治35）年の10年間の間にどのようなことが起きたかについて掘り下げる必要が出てくる。

Ⅱ　「実現」という日本語を巡る逡巡

一見して間接的なアプローチになるが、日本語「自己実現」が「自己」と「実現」といった二つの単語で成り立っていることに注目して、各々の単語の出自を確認する。

前者の「自己」については、道元の言葉として有名な“仏道といふは、自己をならふなり”という一文が、13世紀中頃に完成した『正法眼蔵』の中に見られることが国語学的に指摘されている[18]。つまり、この言葉は、近代以前のはるか昔から用いられていた。

これに対して、後者の「実現」は、近代以前には存在していなかった和製漢語である。実際、明治維新直後に発行された英和辞典では、“realization”が“実にすること”および“金を以て地に換えること”や“実見すること”と訳されていて、「実現」は書かれていない[19]。また、1889（明治22）年から刊行され始めて1891（明治24）年に完結した近代的国語辞典である『言海』の中には、その項目として“実験”や“実検”などが掲載されているのにもかかわらず、「実現」は見当たらない[20]。

A　英単語“Realization”の訳語

グリーン倫理学の導入したての時期に、“realization”を「実現」と訳す人はいなかった。哲学会が発行している『哲学雑誌』を読み解いていくと、明らかである。

1894（明治27）年12月の時点で中島徳蔵がグリーンの“智識論”を紹介した際には、“Realization”を日本語に訳さず、そのまま用いている[21]。また、溝淵進馬は、1895（明治28）年の7月の時点で、グリーンの“知識界心霊と自然界心霊との関係”を問うていく中で、“自己に現す”という表現を用いていても、「自己を実現する」というような表現は一切用いていない[22]。

他には、西田幾多郎がグリーンの『倫理学序説』の概要をまとめて、1895（明治28）年5月に3回にわたり『教育時論』に出した論文では、“Realization”に対して“現実化”という訳語を当てている[23]。さらに、西田は、1911（明治44）年の時点においては、“意志の発展完成は直に自己の発展完成となるので、善とは自己の発展完成（self-realization）であるといふことができる”という見解を示して、“realization”を「発展完成」と言い換えている[24]。

ところが実は、1884（明治17）年発行の『改訂増補　哲学字彙』では、英単語“realization”に「実現」という日本語が当てられている[25]。つまり、1880年代前半には、「実現」という日本語がすでに哲学的文脈で存在していたのである。当然、哲学徒である中島徳蔵や溝淵および西田が、この訳語を知らなかったはずがなかろう。にもかかわらず、なぜ彼らは、この「実現」という日本語訳を用いなかったのか。

B 「自己現化」という日本語の意義

ここで特記すべきは、高山林次郎（高山樗牛）である。高山は、“グリーン氏曰く”という言い方で“倫理学序論、189頁”を引用した後に、“是の如き説はグリーン氏に初まりたるに非ずして、ヘルデル（1744－1803）既に甚だ是に似たる説を唱へたり”と述べ、ドイツの哲学者であり詩人でもあるヘルダー（Johann Gottfried von Herder）が“最高の道徳、最高の知識”とみなした考え方を引用する[26]。

> 人間は精神的神霊の縁で以て自己を現化する所のものにして、歴史は是れ現化の形成なり。故に人間最終の目的は、自己の中に神を現ずるにあり[27]。

高山が引用した箇所にしたがえば、「自己を現化する」とは、「自己の中に神を現ずる」に言い換えられるように、「自己と神との関係」により成り立つ概念である。だが、高山は、グリーンとヘルダーの考えに疑問を呈しつつ、道徳的な最高理想たる「自己現化」について論評する。

> 故に予輩は完全なる自己現化は理想的観念に止まり実際有り得べからずと結論せざるを得ず[28]。

ここで、高山の結論の可否は問わないけれども、明らかにグリーン流の“self-realization”が「自己現化」という日本語に変換されていることに注目すべきである。つまり、1895（明治28）年の8月の時点では、“Realization”という英単語に「現化」という日本語が当てられていたというわけである。

この“げんげ”や“げんけ”とも“げんか”とも読める「現化」という単語は、“神仏などが姿を変えてこの世に現れること”を意味し、14世紀後半にはすでに存在していた言葉である[29]。強調すべきことは、1895（明治28）年の夏の時点では、グリーン的な意味合いで“realization”が言われるとき、こうした宗教的ニュアンスが強調されていたことである。ひるがえって、安易に「実現」と訳すべきでないほど、グリーンの“realization”が、神々しい水準に位置しているとみなされている証左である。

ただし、10年後の1905（明治38）年に出された『普通術語辞彙』において、“現化”という項目を引いてみると、英語“Realization”とドイツ語“Verwirklichung”とが示され、“実現も同義”という添え書きとともに、その“意義”として“現化とは、思想又は空想を化して実際と成し、之を事実に現はすと又は事実となりて現はれたるを意味す”と書かれている[30]。このように、時代が下れば、「現化」という日本語は、その意味合いが神的要素の立ち現れだけに限られなくなっているけれども、1895年当時は、宗教的ニュアンスを取り除けないグリーン流の「リアリゼーション」に対して適訳だった。

Ⅲ 日本語「自己実現」の歴史的原点

英語をカタカナ表記した日本語として示せば、「セルフ・リアリゼーション」とは、グリーンの言葉である。だが、グリーンの自己実現思想それ自体は極めて難解なものであった。そのため、結果的にではあるが、グリーンの系列に位置する別の思想家をつうじて、グリーンの思想のエッセンス部分が理解されたことが、日本語「自己実現」の原点になっている。ただし、それは、グリーンの思想全体の中でも、当時の輸入者にとって都合の良い部分が突出する形の受容でもあった。

A　日本語「自我実現」の登場

1895（明治28）年の12月に中島力造が『哲学雑誌』に紹介したミューアヘッド（John Henry Muirhead）の倫理学書は、“英米に於て哲学文学を初め科学歴史等の新智識を一般人民に普及せんことを目的とする学会”である“大学拡張会”を母体として、“倫理学上の新智識を平易に世人の間に流布せんとするに在る”ことを目的として出された[31)]。中島の紹介文では、英語を日本語訳した部分にカタカナ英語を当てることにより、目新しい概念を際立たせようとしている。

> 行為の主要の原素は意志の作用なり、意志の作用なければ行為生せず、而して意志は自我（セルフ）と同一なり[32)]。

この文章では、「自我」に「セルフ」というルビが振られている。翻って考えれば、“self”の日本語訳が「自己」ではなく「自我」であることが強調されている。そして、何回も登場した「自我」という言葉が再びルビを打たれて登場する場面もある。

> 以上の諸説（＝「克己を目的とするもの」と「進化論的快楽説」…引用者注）皆不完全なるを以て、吾人こゝに一般の善（コンモン・グード）を以て目的となさんとす、蓋し人は社会を離れて生存するを得ず、故に一個人より云へば人の目的は其の人の真の自我の実現（セルフ　リアリゼーション）なりと雖も、之を社会の外に於てはなし得べからず、之を以て社会の進歩即善を謀ると必要なり、自我の実現は之と共に行はるゝに外ならず、是れ目的を一般の善に置く所以なり[33)]。

ついに、「セルフのリアリゼーション」が明示され「自我の実現」という日本語が登場した。内容上は、「一般の善（＝common good）」を目的とすることと対になる形で「実現」という日本語が当てられた。

> 既に此の如くして実現したる自我は快楽論者の云へる如く快楽のみの自我にも非ず、又た非快楽論者の所謂理性のみの自我にも非ず、両者を具有して而も意志の支配下に在る者なり[34)]。

ここでは、「実現したる自我」は、「快楽のみの自我」でもなければ、「理性のみの自我」でもない。それは、「意志」の支配下に、「快楽」と「理性」とを統合した存在だと位置づけられているのである。

それでは、四文字の成語として熟した「自我実現」という言葉が初めて登場するのは、いつのことであろうか。実は、この論文を少し読み進めれば、それが見つけられる。

> 標準は一定のものなるも其の間にまた変遷あり、換言すれば一般の善が時と所とによりて異なるなり。此の点より考ふれば標準は相対的なりと謂ふべし。然らば道徳には統一なきか、曰く否、変化の中自から統一あり、其中に含まるゝ事柄は異なるとも、徳と見るものは一般の善即ち真の自我実現なればなり[35)]。

以上から、“self-realization”（イギリス英語では“self-realisation”）に「自我実現」という日本語を当てて初めて用いたのは、トーマス・ヒル・グリーンの思想を日本に最初に紹介した中島力造その人であるとみなせる。これらの一連の史料的発見により、日本語「自己実現」の歴史的原点を、イギリス

英語 “self-realisation” を中島力造が「自我実現」と訳して『哲学雑誌』1895（明治28）年12月号に発表した時点だと確定できた。

B 「個人と社会との調和」概念としての登場

この「自我実現」は、1892（明治25）年10月に中島が哲学会例会で「英国新カント学派に就て」と題した講演の中でトーマス・ヒル・グリーンの思想の大枠を紹介して以来3年を経てから発表されたことになる。いわば、こうした年月を経て満を持して登場した言葉が「自我実現」だったということであり、練りに練られた末に生まれた日本語だと言えよう。

ここで、内容論的な重要ポイントを指摘すると、「自我の実現」という表記が日本史において初登場する際に「社会」という日本語を伴っていることである。先に引用した部分について、特に重要な箇所を抜粋して再引用し、丁寧に確認しておく。

> （前略…引用者）、人は社会を離れて生存するを得ず、故に一個人より云へば人の目的は其の人の真の自我の実現（セルフ リアリゼーション）なりと雖も、之を社会の外に於てはなし得べからず、之を以て社会の進歩即善を謀ると必要なり、自我の実現は之と共に行はるゝに外ならず、是れ目的を一般の善に置く所以なり、（後略…引用者）[36]。

大前提として、「人は社会を離れて生存するを得ず」という言い方で、人間の生存の必須条件として、「社会」の存在が強調される。その上で、「自我の実現」が「社会の外」においては成すことが不可能なものであり、「目的を一般の善に置く」理由として、「善」である「社会の進歩」と「自我の実現」が常に対になっていなければならないという論理が示されている。そのため、「一個人」として「真の自我の実現」を果たすのは、同時に「社会」との関係を調和的に展開することでもある。つまり、「個人と社会との調和」こそが、「自我の実現」の必須条件となる。いずれにせよ、「自我実現」にとって「社会」が必要不可欠のキーワードとして位置づけられている点が極めて重要である。

しかも、「社会」という単語は、上記の引用部分でも3回にわたって登場している。このように、日本語「自己実現＝自我実現」の歴史的原点には「社会」が密着していたという事実が明らかになった。したがって、「社会」とは、歴史的な意味合いから考えて、自己実現思想にとって最重要キーワードの一つだと言い切れる日本語なのである。

ここで注意すべきなのは、引用部分の「セルフのリアリゼーション」は、神との関係性を前提としたグリーン流の概念ではなく、「一般の善」と同義であることを意味するミューアヘッド流の自己実現思想を媒介して成立した言葉である。「自我実現」もしくは「自己実現」という言葉は、イギリス理想主義の祖であるグリーンの名が常に前面に打ち出されつつも、実際にはミューアヘッドによる平易な自己実現思想を仲介して日本に広まったとみなせる。というのは、グリーンの自己実現思想は「神と人間との調和的関係」を問い続けている点で非常に難解で感受しにくかったのに対して、ミューアヘッドのそれは「個人と社会との調和的整合」を推奨するものであり、キリスト教的背景を持たない日本人にとっても、日常的な生活感覚の延長上で比較的容易に理解できるがゆえに受け入れやすいという一面があったからである。

C　自己実現理念のアリストテレス哲学への還元

以上より、19世紀末の時点で「自我実現」という言葉の発生が「自己実現」という日本語の原点であることが確認できた。それでは、「自己実現」という日本語そのものは、いつくらいから広がり出したのか。

前出の『普通術語辞彙』は、“主として哲学、倫理学、心理学、論理学、美学等の部門に属する術語”[37]を収集した辞典であり、1905（明治38）年に発行されている。この辞典には、“自己実現”という項目が掲載されており、英語“Self-realization”とドイツ語“Selbstverwirklichung”が明示された上で、“意義”としては“自己実現と云ふのは、自己の発達の可能性を成就することである”と述べられている[38]。この事実により、20世紀初頭には、「自己実現」が改めて定義を必要とする日本語として位置付いていたことが確認できる。そして、この用語に関する説明・解説は、内容的な側面と用語的な側面とを分けたものとなっている。

まずは、「自己実現」の用語的源流を明示した部分を抜き書きしておこう。ここでは、どのような人物が関係しているかを確認しておきたい。

> 自己実現と云ふ語は、新「ヘーゲル」学派の人々によりて有名となったものであるが、彼の「グリーン」は勿論、「デウェー」、「マッケンヂー」、「ミュアヘッド」の如きも、自己実現説に感化せられたることは決して尠からぬのである[39]。

この一文から、「自己実現」という用語を普及させた代表格の人物がトーマス・ヒル・グリーンだと認識されていることが明らかである。ここで、このグリーンをはじめとした「新ヘーゲル学派」の思想家として提示された「デウェー」・「マッケンヂー」・「ミュアヘッド」の3名は、現代的に表記し直すと「デューイ」・「マッケンジー」・「ミューアヘッド」となるが、「自己実現説」を語る上で相当に重要な人物として扱われている。自己実現思想の受容期において、彼らの訳書や解説書が出されているので、時系列に沿って確認しておく。

まず、ミューアヘッドの学説については、先に丁寧に確認したように、日本における「自我実現説」の輸入において重要な役割を果たしているが、1897（明治30）年の時点で桑木厳翼が訳書を出しており、そこでは“自我実現”という表記が見られる[40]。次に、デューイ（John Dewey）の著作については、1900（明治33）年の時点で、中島徳蔵が訳書を出しており、そこには“自己が実現することを欲し、また実現するの価値あり”という表記が見られる[41]。さらに、1900（明治33）年の時点で、綱島栄一郎（綱島梁川）は、マッケンジー（John Stuart Mackenzie）の著作を訳して解説する際に、“自家円現派の倫理説”という点で、それがデューイとミューアヘッドの著作と類似しており、“三人兄弟というべき書きぶり”であると評している[42]。実際、翌1901（明治34）年にマッケンジーの解説書を出している雀部顕宣は、マッケンジー自身が、デューイ氏やミューアヘッド氏の書物が出版される以前から著述活動をしていなければ、彼らと同じような倫理書籍を世間に公表する必要がなかっただろうと考えていたことを指摘している[43]。以上の事実を鑑みると、自己実現思想の元祖として、改めてグリーンの存在感が浮かび上がってくる。

だが実は、『普通術語辞彙』では、「自己実現」の用語的源流を説明するよりも先に、それの思想的源流について述べている。この点に注目すべきである。

彼の倫理学上に於て、人間行為の最上目的は、自己実現であると云ふ説は、古代にもあれば近世にもある、古代に於ける此説の代表者は、「アリストートル」である、即ち氏は、善と云ふものは、人類精神或は合理的精神の実現なりとせし点に於て自己実現説を奉ずるものと云はれるのである、(後略…引用者)[44]。

1900年前後当時の倫理学では、「人間行為の最上目的は、自己実現である」という説が、古代にまで遡れると考えられていた。ここで「アリストートル」と表記されている人物は、ギリシア哲学者のアリストテレス(Aristotle)のことであるが、彼の思想の中に実質的に「自己実現説」を見出すことができるというわけである。こうして、アリストテレス自身が「自己実現」という言葉を直に用いて思想を展開したわけではないが、「自己実現思想の原点としてのアリストテレス」という発想が出てきた。

こうした状況を生み出した原因は、自己実現理論において、「善」がキーワードの一つになったことにある。先にも見たように、輸入された自己実現思想では、「一般の善」が最重要であるが、アリストテレスが「一般の善」と同義の「共通善」という考え方を最初に言った人であることが、決定打となっていた[45]。

アリストテレス研究の蓄積を踏まえれば、“もっとも善きもの”に言い換えうる“それこそ善いもの”が、“「最高善」(伝統的にラテン語でsummum bonum”と呼ばれてきたもの)”に相当する[46]。つまり、「一般の善=共通善」こそが「最高善」であるという思考が軸となって、自己実現思想の祖としてアリストテレスが奉り挙げられるという事態が生じたのである。それと同時に、「善」という主題について考える際に、顕在的もしくは潜在的に自己実現思想が伴奏するという事態も生じた。

念押し的に確認すれば、アリストテレス自身が「自己実現」という表記を用いて自らの思想を表現したのではなく、後付け的にアリストテレス思想に対して「自己実現」という名称が与えられた[47]。グリーンによって「自己実現」として名付けられた思想の「本質的内容」たる「善」を基点として、それに相当するものがないかを過去に遡っていって定め直された結果として、「自己実現」の原点にアリストテレス思想が設置されたのである。ある言葉が先にあって、その言葉の内容が規定されるという筋道ではなく、定義に相当する内容を基準にして、その内容を体現している状態に対して、その言葉を付与するという手順である。この場合の「物差し」は、その言葉の「形態」ではなく「意味」なのである。

Ⅳ 「自己」と「自我」とが区別される理由

筆者は、当初は、「自己実現」でなく「自我実現」として発生したことに、それほど強い問題意識を抱いていなかった。だが、当時の状況を掘り起こすと、“self”が「自己」ではなく「自我」として訳されていることに歴史的に深い意味があることが判明した。

A 日本語「自我」の再創造

桑木厳翼は、中島力造の勧めに応じて、ミューアヘッドの倫理学の翻訳を完成させたが、1897(明治30)年に発行された時点で、その翻訳は大変に重要な仕事として話題になった[48]。そして、『倫理学』と題されるこの本の最初に、以下のように書かれている。

若し夫れ訳語に至りては、既に定訳あるものは大抵之に従へりと雖も、新に創作すべきもの極

めて多く、且つ通常のごと区別せんが為に特に生硬なる新熟語を用ゐたるものあり、例へば、読者は「洽善」「自我」「勇毅」等の奇怪なる用語例を咎むるなからんと、余の切望する所なり[49]。

このように、訳語の選択については、桑木が相当に苦労したことが判明した。このような事情もあり、見慣れない新語も出てくるというわけである。

桑木にしたがう限りであるが、「自我」という日本語は、この時代に登場した新熟語のように思われる。実際、前出の大槻文彦編『言海』を引いても、“じか”の見出しで“自家”という二文字が示され、それが“オノレ”を意味することが示されているが、そもそも「じが」という見出しがなく、「自我」という二文字は見当たらない[50]。また、この辞書では、“じこ”の見出しで“自己”という二文字が示され、それが“オノレミヅカラナル”と“自身”を意味することが示されているが、やはり「自我」という二文字は見当たらない[51]。

また、桑木は、「自我実現」という言葉も提案する。先に見たように、この「自我実現」という日本語は、1895（明治28）年12月に、中島力造がミューアヘッドの著作を紹介する時点で新規に造語されたものだが、桑木は、この言葉を、そのまま引き継いでいるわけである。

（前略…引用者）目的に関する諸説即ち快楽説克己説進化論等を検して共に不完全なりとし、終に目的は一般共通の善（洽善＝善は俗語のよい事に相当する也）にありとし、之より諸徳を分類し、終りに道徳の進歩を述へて其の理想的なるに論及して論を結べり、而して上に謂へる洽善は一方より云へば各個人の真の「我」即自己の理想が現実にせらるゝとなり、之を自我実現と名づく。即ち洽善と自我実現との同体二面は本書を貫通する所の精神なりとす、（後略…引用者）[52]。

桑木は、“各個人の真の「我」即自己の理想が現実にせらるゝ”ことを“自我実現”と名づけている。「自己の理想」が“真の「我」”であり、この“真の「我」”に「自我」という造語が当てられている。そのため、言葉の定義上、「自己」と「自我」とは同一でなく、「自我」は「特別な自己」として取り扱われる。

よって、新規提案された「自我実現」とは、「自己が自我へと実現すること」である。「自己」のめざすべき理想のあり方として「自我」が位置していて、これまた新語である「洽善（こうぜん）」すなわち「一般共通の善」が、その理想状態として「目的」に位置づけられるのである。

ただし、現代における国語学的な研究の成果を踏まえれば、中島や桑木の気づいていなかった範囲で、「自我」という日本語がすでに歴史的に存在していたことを付け加えておかなければならない。まず、中島がミューアヘッド理論を翻訳して「自我」という単語を公表した1895（明治28）年より少し前の時期に、「自我」という表記が、宗教哲学の文脈で使われた痕跡が残っている[53]。また、17世紀初頭（1603～04年）に出された『日葡辞書』（Japanese-Portuguese Dictionary Nagasaki Japan 1603-4）の142頁では、当時の日本語のローマ字表記“Iiga”が見出しになっていて、“Eu mesmo”というポルトガル語の訳が出ている[54]。“Eu mesmo”とは、“私自身”を意味する連語であり、一人称単数の代名詞として“私は”を意味する“eu”は、男性名詞として用いられるときには、“自我”を意味する[55]。さらに、16世紀にまで遡れば、「自我」を用いた文章が存在していた可能性が指摘できる[56]。そこで、栃木県足利市にある鑁阿寺が所蔵する「論語抄」の影印本を入手できたので、それを閲覧してみると、“自我ヤ身ニ過失有リヤ否ト視察スル”という表記が発見できた[57]。この『論語』についての解説本の中身を直に確認できたことにより、「自我」という日本語の存在が、古くは室町時代まで遡ることができるこ

とが確実となった。

以上の事実を踏まえても、「自我」という言葉が19世紀末には全く一般的でなかったことは、たしかなようである。よって、「自我」について、「新規創造」と位置づけるのには無理があるけれども、「再創造」という位置づけであるならば、新規の近代的日本語とみなすことには決して無理はないと思われる。

B　“Self”の日本語訳の使い分け

このように、「自我実現」という新しい日本語の登場は、「自我」という言葉の造語も伴っている。中島力造や桑木厳翼などの言動によるかぎりは、現代日本人が日常語として用いている「自我」は、近代日本語という意味においてだが、19世紀末以降に登場した言葉だと確認できる。

実際、1881（明治14）年に出された『哲学字彙』では、“Self”に“自己”という日本語訳が当てられ、“我、自己”という訳が当てられた英単語として“Ego”が示されているけれども、「自我」という日本語は見当たらない[58]。また、1884（明治17）年に出された『改訂増補　哲学字彙』においても、全く同様の状況である[59]。だが、30年近くを経て、1912（明治45）年に発行の『哲学字彙－英独仏和－』においては、“Self”に対して“我、自己、自我”という日本語訳が示されている[60]。加えて、この辞書では、“Ego”に対して“我、自我”という訳語が当てられている[61]。したがって、明治中期に再登場した「自我」は、少なくとも哲学・倫理学の分野では明治末期には一般化していた日本語だとみなせる。

では、“self”を含んだ英単語に対する日本語訳がどうなっているかについて、丁寧に確認してみよう[62]。『哲学字彙－英独仏和－』において“Self”の部分に「自我」が当てられているのは、“Self-realization”と“Self-denial”の2語のみである。さらに、“Self-realization”について、“自我実現”という訳語が示されているのにもかかわらず、「自己実現」という訳語が示されていないことを特筆しておきたい[63]。これは、たとえば“Self-determination”が“自決、自己決定”、“Self-creation”が“自己創造”、“Self-culture”が“自修、自己修養”、“Self-preservation”が“自己保存”、“Self-satisfaction”が“自足、自己満足”というように、「自我」ではなく「自己」が用いられているのと対照的である。

では、どのような基準で、このような訳し分けがなされているのか。ここでは、“Self-negation”を“自己否定”と訳しているのにもかかわらず、“Self-denial”を“克己、自我否定”と訳しているように、否定される対象の“self”について「自己」と「自我」とが対比されていることに注目しよう[64]。日本語の“克己”は、“己に克つこと”や“自分の欲望や邪念にうちかつこと”を意味する[65]。このことを踏まえると、否定されて乗り越えられた後のプラスの意味合いが含まれる「自己」を「自我」と呼んでいるように思われる。

従来は井上哲次郎が中心になって作成されてきた『哲学字彙』は、1912（明治45）年版では、元良勇次郎と中島力造が加わった共著の辞書となっていた。「自我実現」はもちろん、「自我」を含む単語の日本語訳には、中島力造の強いこだわりが垣間見えるのである。

C　「自己実現」と「自我実現」との区別

明治中後期には、“self-realization”における“self”については、「実現」された後の、単なる「自己」にすぎなかった状態を乗り越えたという意味合いが込められて「自我」と訳されたと考えられる。「自我実現」という表現を新規創造した学者達にとって、“self-realization”を「自己実現」でなく「自我実現」と訳し分けたことには、明確な区別の意図があった。

先に見たように、1902（明治35）年の時点で西晋一郎がグリーンのセルフ・リアリゼーションを訳したときには、すでに「自我実現」という日本語が存在していて時を経ていたのにもかかわらず、「自我実現」ではなく「自己実現」が当てられていた。これは、グリーンの『倫理学序説』そのものは、宗教的要素が強すぎて社会的ニュアンスが後景に退きがちだったため、「自我」という表記を用いにくかったからである。にもかかわらず、中島は、自らグリーン思想を丁寧に解説した書物において、「自我実現」を用いている。

> 一言で言へば、自我の実現は社会的生活を為すことに依て達し得らるゝのである。他の人格と共同生活を為すことに依て、人は始めて自己を実現し得るものである。共同生活即ち社会生活は人類の特性である[66]。

この文章にしたがえば、「自我実現」が「目指されるべき理想状態」であるのに対して、「自己実現」は「自我実現という理想状態に向かう過程」だということになる。そして、最重要ポイントは、「自己を自我へと実現すること」、つまり「出発点としての自己」が「到達点としての自我」へと到ることは、まさに社会においてこそ「実現される」ということである。この発想は、グリーンの看板を背負いながらも、中身としてはまさにミューアヘッドの思想の延長上にある。「自我実現」は、グリーンの着想を基盤としつつも、中島力造の思い入れと独創を伴った概念と化して再提案された日本語だとみなされよう。

まとめにかえて

本稿により、現代日本語の「自己実現」は、比較的最近になって用いられるようになった新しい言葉のように思われがちだが、実はかなり長い歴史を持っていることが確認できた。少なくとも歴史的厳密性に則れば、この言葉の大本を心理学通念と決めつけるのは、誤った認識である可能性が極めて高い[67]。「自己実現」は、欧米語を翻訳したものを出発点にしており、どんなに新しく見積もっても20世紀初頭には存在していた日本語である。

また、本稿の成果から、近代日本思想史を研究する際に「自己」の問題を扱うのであれば、イギリス理想主義の受容を避けて通ることができないことが明らかになった。なお、この「自己」の問題は、現代に至るまで「社会」および「国家」との関係において興味深く展開する[68]。本稿には、その準備的議論の意味合いもある。

－注・引用文献－

1) 佐々木英和「明治中後期における自己実現思想の輸入の様相－日本語『自我実現』の創造にイギリス理想主義が果たした役割－」、行安茂編『イギリス理想主義と河合栄治郎』世界思想社、2014年所収、196 ～ 212頁。本稿は、この論文を下敷きにして、新たに入手した史料などを加味した上で、大幅に修正・加筆したものである。
2) 筆者は、これまでの自己実現概念について、“充実・快感モデル－生きがい感”、“成長・完成モデル－人格の完成”、“調和・適応モデル－個人と社会との調和”の3タイプに分類して、議論を展開している（佐々木英和「第3章　自己実現の人間教育論的意義」、杉浦健・八木成和編著『人間教育

の基本原理－「ひと」を教え育てることを問う』、ミネルヴァ書房、2020年所収、50 ～ 54頁）。

3）新村出編『広辞苑　第四版』、1991年第4版第1刷（第1版第1刷1955年）、1117頁。

4）同上、1101頁。ただし、見出し語としては、「自己実現」だけでなく、「自己実現説」も「自我実現」も掲載されていない。

5）同上。

6）新村出編『広辞苑　第五版』、1998年第5版第1刷（第1版第1刷1955年）、1159頁。ただし、見出し語としては、「自己実現説」も「自我実現」も掲載されていない。

7）新村出編『広辞苑　第七版』、2018年第7版第1刷（第1版第1刷1955年）、1252頁。ただし、見出し語としては、「自己実現説」も「自我実現」も掲載されていない。

8）友枝高彦・近藤兵庫共訳『グリーンとその倫理学』、培風館、1932（昭和7）年、1頁。なお、この本は、グリーンの著書の翻訳という体裁で出版されたものであるが、友枝高彦と近藤兵庫とが“論旨を害しない”程度に、内容や構成を変更した書籍である（同上、1 ～ 2頁）。よって、この本は実質的には、厳密な意味での訳書とは言いがたいものであり、グリーンについての解説書に近いと言ってもよく、むしろ友枝や近藤の創意が積極的に入り込んだものだと位置づけられる。

9）雑報「学会」、哲学会編『哲学雑誌』第7冊第69号、哲学雑誌社、1892（明治25）年11月5日発行所収、482頁。

10）中島力造「英国新カント学派に就いて」（承前）、哲学会『哲学雑誌』第7冊第70号、哲学雑誌社、1892（明治25）年12月5日発行所収、493 ～ 501頁。

11）中島力造「英国新カント学派に就いて」（承前）、哲学会『哲学雑誌』第8巻第71号、哲学雑誌社、1893（明治26）年1月10日発行所収、584頁。

12）中島力造「英国新カント学派に就いて」（承前）、哲学会『哲学雑誌』第8巻第72号、哲学雑誌社、1893（明治26）年2月10日発行所収、650頁。

13）北村三子『青年と近代－青年と青年をめぐる言説の系譜学－』、世織書房、1998年、77 ～ 100頁。

14）行安茂「日本におけるT・H・グリーンの受容」、行安茂・藤原保信責任編集『T・H・グリーン研究』、御茶の水書房、1982年所収、310頁。

15）西晋一郎『グリーン氏倫理学序論』、育成会、1901（明治34）年、61頁。ただし、この著作の中では、「自己実現」という四文字熟語は用いられていない。

16）グリーン『グリーン氏倫理学』（西晋一郎訳）、金港堂、1902（明治35）年、訳語索引 9頁。なお、原著は、Thomas Hill Green, *Prolegomena to Ethics,* edited by AC.Bradley,1883.

17）同上、356頁。なお、西の訳書の訳語索引においては、“神的　Divine.”（同上、訳語索引 10頁）、“原理　Principle.”（同上、訳語索引 6頁）と表記されている。

18）日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典　第2版第6巻』（さこぅ～しゅんひ）、2001年第2版第6巻第一刷（第一版第一巻発行は1972年）、607頁。

19）高橋新吉等編『改正増補 和訳英辞書』、上海・美華書院、1869（明治2）年、520頁。

20）大槻文彦『言海』第3冊（自し至ち）、印刷局、1890（明治23）年、451頁。なお、この著作では、「し」という文字について、漢字「志」から派生した変体仮名が一貫して用いられている。

21）中島徳蔵「「具リーン」氏智識哲学論ヲ読ム」、哲学会編『哲学雑誌』第9巻第74号、哲学雑誌社、1894（明治27）年12月10日発行所収、922頁。

22）溝淵進馬「「具リーン」氏知識論」（承前）、哲学会編『哲学雑誌』第11巻第101号、哲学雑誌社、

1895（明治28）年7月10日発行所収、525 ～ 547頁。なお、引用部分について、カタカナ表記をひらがな表記に改めた。

23）西田幾多郎「グリーン氏倫理哲学の大意」、『教育時論』362 ～ 364号、開発社、1895（明治28）年5月所収。ただし、この部分は、以下で確認した。山本良吉編著『倫理学史』、冨山房、1897（明治30）年、301頁および335頁。

24）西田幾多郎『善の研究』、弘道館、1911（明治44）年、188頁。

25）井上哲次郎・有賀長雄『改訂増補　哲学字彙』、東洋館、1884（明治17）年、105頁。

26）高山林次郎「道徳の理想を論ず（承前）」、哲学会編『哲学雑誌』第11巻第101号、哲学雑誌社、1895（明治28）年7月10日発行所収、513 ～ 514頁。なお、本文の漢数字は、アラビア数字に改めて表記した。以下同様。

27）同上、514頁。この部分は、高山が“ファルケンベルヒ氏近世哲学史254頁以上”を引用した箇所である（同上）。また、高山は、“ヘルデル、グリーン諸氏の如く宇宙的自我と言ふ如き大胆なる仮定を設くるを必とせず”と主張している（同上、524頁）。

28）高山林次郎「道徳の理想を論ず（承前）」、哲学会編『哲学雑誌』第11巻第102号、哲学雑誌社、1895（明治28）年8月10日発行所収、605 ～ 606頁。なお、強調点は、原文のまま。

29）日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典　第2版第5巻』（けんぇ～さこい）、2002年第2版第5巻第2刷（第1版第1巻発行は1972年）、5頁および23頁。

30）徳谷豊之助・松尾勇四郎『普通術語辞彙』、敬文社、1905年、265頁。傍点は原著そのまま。なお、この辞典で“実現”という項目を見つけることができるが、そこには“現化に同義”で、その項目を参照するように指示されているのみで説明はない（同上、508頁）。

31）中島力造「ジェー、エチ、ミュイアヘッド氏倫理学」、哲学会編『哲学雑誌』第11巻第106号、哲学雑誌社、1895（明治28）年12月10日発行所収、976 ～ 978頁。なお、“Muirhead”の日本語表記については、「ミュイアヘッド」・「ミュイアーヘッド」・「ミュアーヘッド」・「ミューアヘッド」・「ミュルヘッド」など、文献により表記はバラバラであり、筆者は「ミュイアーヘッド」を採用していた（佐々木、前掲論文、2014年、203 ～ 205頁）。だが、本稿では、引用部分等を除いて「ミューアヘッド」と統一的に表記することにする。

32）同上、980頁。ここでは同時に、“自我の自から動作に顕るゝもの”という表現があり、“Self expressing itself on Action”という英語が示されている（同上）。

33）同上、983頁。下線は、引用者による強調。

34）同上。下線は、引用者による強調。

35）同上、984頁。下線は、引用者による強調。

36）同上、983頁。下線は、引用者による強調。

37）徳谷・松尾、前掲書、3頁。

38）同上、423頁。傍点は原著。

39）同上。

40）桑木厳翼「緒言」、ミューアヘッド『倫理学』（桑木厳翼訳）、冨山房、1897（明治30）年所収、3頁。なお、原書は、“I.H.Muirhead”（“I.”は“J.”の間違いだと思われる）による“*The Elements of Ethics, an Introduction to Moral Philosophy*（1892,1895.）”である（同上）。桑木は、この3年後に自ら解説した書物において、ミューアヘッドの学説について、“グリーンの説を焼き直したに過ぎないと

いふことが出来るかも知れぬ”と述べている（桑木厳翼『ミュルイヘッド氏倫理学』、育成会、1900（明治33）年、4頁。下線は原著）。

41）中島徳蔵『ヂュイー氏倫理学書解説』、育成会、1900（明治33）年、144頁。なお、ジョン・デューイについては、“初期のヘーゲル主義から後期のプラグマティズムへの展開がいわれるように、その思想は変化・発展した”ことを忘れてはならない（浅野博宣「デューイ・ジョン」、大場健・井上達夫・加藤尚武・川本隆史・神崎繁・成田和信編『現代倫理学事典』、弘文堂、2006年所収、610 ～ 611頁）。

42）綱島栄一郎『マッケンヂー氏倫理綱要』、東京専門学校出版部、1900（明治33）年、2頁。傍点は、原著者による。また、引用者が、旧字体「圓」を新字体「円」に書き改めた。なお、この著書には、“道徳の最大目的は自己実現にあり”という表記がある（同上、92頁、傍点は原著者）。

43）雀部顕宣『マッケンジー倫理学書解説』、育成会、1901（明治34）年、217頁。

44）徳谷・松尾、前掲書、3頁。

45）菊池理夫は、“アリストテレスによれば、「逸脱した国制」においては、支配者の私的利益だけが追求されているのに対して、理想的な「最善の国制」においては、人民全体に共通する「共通善」がめざされている”とまとめている（菊池理夫『共通善の政治学－コミュニティをめぐる政治思想－』、勁草書房、2011年、14頁）。なお、菊池は、“共通善”と“共通の利益”との比較を踏まえながら、“アリストテレスの「共通善」”についての理解を深めている（同上、14 ～ 17頁）。

46）アリストテレス、神崎繁訳『ニコマコス倫理学』（アリストテレス全集15）、岩波書店、2014年、19 ～ 21頁。なお、引用部分には、神崎の「補注」も含んでいる。ところで、アリストテレスは、“「善」と「幸福」を結合する思想”として、“最高善としてのエウダイモニア”を位置づけていたのである（菅豊彦『アリストテレス「ニコマコス倫理学」を読む－幸福とは何か』、勁草書房、2016年、36 ～ 59頁）。

47）1927年生まれの哲学者ローベルト・シュペーマン（Robert Spaemann）は、“古典的倫理学の基本テーマ－幸福”を主題とする論考の最初の一文で、“生の自己実現を構成する実践的諸要因を初めて統合し提示したのは、アリストテレスである”と宣言している（ローベルト・シュペーマン『幸福と仁愛－生の自己実現と他者の地平』、宮本久雄・山脇直司監訳、東京大学出版会、2015年、2 ～ 3頁および284頁）。

48）雑報「ミュイーアヘッド氏の和訳」、哲学会編『哲学雑誌』第12巻第125号、哲学雑誌社、1897（明治30）年7月10日発行所収、636 ～ 637頁。

49）桑木、前掲論文、3頁。下線は引用者による。

50）大槻著、前掲辞典、433頁。

51）同上、439頁。

52）桑木、前掲論文、5頁。なお、本文中の“洽善＝善は俗語のよい事に相当する也”という表現については、表記の都合上、レイアウトを変更し「＝」を付加した。

53）清沢満之が1892（明治25）年に出版した『宗教哲学骸骨』の中に、“其行路に於ては常に自他相助け彼我相倚るものなり。此の如き自我を名けて因といひ他彼を名けて縁といふ”（傍点は引用者）という表記があると指摘されている（日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典　第2版　第6巻』（さこう～しゅんひ）、2002年第2版第6巻第2刷（第1版第1巻発行は1972年）、498頁）。これに関して、後ほど、直に文献に当たって、表記や内容を正確に確認したいと考えている。

54) オックスフォード大学ボードレイアン図書館・原本所蔵『キリシタン版　日葡辞書』（カラー陰影版）、勉誠出版、2013年、295頁。なお、この重要情報にまで辿り着けたのは、“日葡辞書（1603-04）「Iiga（ジガ）」<訳>「自我　じが」”という表記に気づけたからである（小学館国語辞典編集部編、前掲辞典、2002年、498頁）。また、ほぼ同時期に、1598年に出された“落葉集”に“自我”という表記が出ていて、“じが”と読むようである（同上）。

55) 市之瀬敦・トイダエレナ・林田雅至・吉野朋子編集委員『プログレッシブ　ポルトガル語辞典』、小学館、2015年、397頁。

56) 16世紀にすでに“足利本論語抄”の“学而第一”として“自我が身に過失有りや否と視察する也”という表現が存在していたことが指摘されている（小学館国語辞典編集部編、前掲辞典、2002年、498頁）。以前の筆者は、これについて、表記として「自」と「我」とが連続しているが、「自ずと我が身に…」というように、意味として分けて考えるべきものであり、成熟した言葉として「自我」が使われているわけではないと主張していた（佐々木、前掲論文、2014年、212頁）。だが、このたび、この「足利本論語抄」に直に当たって、2文字の成語として「自我」がすでに用いられていたと結論できたので、その点を訂正したい。

57) 中田祝夫解説『抄物体系 足利本 論語抄－九華自筆本（室町後期写）鑁阿寺蔵－』、勉誠社、1972年所収、14頁。この書物は、“九華老人”と自称する“足利学校第七世庠主”の“玉岡瑞璵”による自筆で遺されたものであるが、この“九華和尚”は、天正6（1578）年に79歳で没したと伝わっている（中田祝夫「鑁阿寺蔵足利本論語抄解説」、同上所収、393～411頁）。よって、この書物は、1500年代の100年間内で執筆されたという話になる。

58) 井上哲次郎他編『哲学字彙－附・清国音符－』、東京大学三学部、1881（明治14）年、28頁および83頁。

59) 井上・有賀、前掲辞書、37頁および114頁。

60) 井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造『哲学字彙－英独仏和－』、丸善、1912年、138頁。なお、項目語となっている英単語“Self”に相当するものとして、ドイツ語の“Selbst”およびフランス語の“soi-même”と“le moi”とが示されている（同上）。

61) 同上、41頁。また、“Ego”には、“自柄、自己、自私”という訳語も当てられている（同上）。なお、同書では、“達人貴自我”という中国語が示されている（同上）。

62) 同上、138～139頁。この2頁に、“self”関連の英単語が集中掲載されている。

63) 同上、139頁。なお、項目語となっている英単語“Self-realization”に相当するものとして、ドイツ語“Selbstverwirklichung”およびフランス語“propre réalisation”が示されている（同上）。

64) 同上。

65) 日本国語大辞典 第2版 編集委員会他編、前掲辞典[第5巻]、2002年、863頁。ちなみに、“克己”も近代以降に登場した言葉のようである（同上）。

66) 中島力造『グリーン氏倫理学説』（輓近倫理学説叢書）、同文館、1909（明治42）年、210頁。

67) いわゆる欲求階層理論で著名なアメリカの心理学者のマズロー（Abraham Harold Maslow）を思い浮かべる人もいるだろうが、時代的には新しい。自己実現概念の形成に関わった思想家を一覧するには、以下を参照。佐々木英和「自己実現」、日本人間性心理学会編『人間性心理学ハンドブック』、創元社、2012年所収、160頁。

68) 佐々木英和「自己実現のパラドックスに注目して」、日本人間性心理学会編『人間性心理学研究』第

29巻第1号、2011年所収、9～17頁。

令和2年10月1日受理

A Factual Study about the Historical Origin of a Japanese Word *Jiko-Jitsugen* Indicating Self-Realization : Why was “Self” Translated as *Jiga* Instead of *Jiko* ?

SASAKI Hidekazu